

# 朝を ひらく

永田 円了  
真国寺住職



自分が自分自身について、どれほど知っているのだろうか。先日、タクシーに乗ったときのこと、運転手さんの話に興味をそそられた。彼いわく、乗せたお客さんの職業をピタリと当てるといふ。今まではほとんど外れなく言い当てていると自慢げな様子。では、私の職業は、と聞いてみた。もし彼が言い当てたら、お釣りはいらん、と言うつもりだった。

お客さんは……と数秒ポーズをおいて、「税理士さんでしょー」。え！ 税理士？ 思ってもいなかった答えにあぜんとし

## 一体私は誰？

た。自分が一番苦手とする仕事である。残念、外れ、とお釣りはしっかりもらってタクシーを降りた。

しばらくして、ハッとする。もしかして、当たってるのでは……。自分が思ってもいない自分の姿。しかし娘からは、お父さんは浪費家でアバウトな人間だ、通信販売で何度も同じものを買う、腰痛用の腰当て器具などは同じものが二つ物置に並ん

でいる。こんなことを言われ続けていると、自分はそんな人間なのかと思ってしまう。

以前に講演したときのこと。「先生は、本当にお寺の住職ですか？」と、大まじめに聞く年配の人がいた。予想もしない質問に、ハッと我に返って、「はい、自坊に帰れば毎日お経も上げ、仏事、写経会、坐禅会もしていますよ」と答えるが、複雑な気持ちになる。一体私は誰なんだろう。

人は日常生活において複数の自分を生きていると言えるのではないか。決して偽りの仮面を使い分けているわけではなく、全てが本当の自分であり、仮面は自分の中の分人である。分人

は相手との相互関係によって生じ、それは多様な個性と「協存」しようとする結果生まれるもの。厳密に言えば、自分が関わり合っている人の数だけ分人は存在するわけである。

あの人と一緒にいる時の分人は好きだ、また別の人という時の分人は嫌いだ、というように自己愛や自己否定は分人を通して把握しているのである。大切なことは、嫌な自分を消してしまいたいという感情を、自分全体を消そうとするような衝動と切り離すことである。複数の分人を束ねる本体が、どつかりと自分の中心にいる。この感覚がある限り、分人にどれだけ失態、批判があろうとも大丈夫。あなたは誰？と聞かれたなら、「私は人間です」。職業は？ 「はい、生きること」です。

# 多様な分人束ね「自分」